巻頭言

令和２年度は、４月に新型コロナウイルス感染拡大による全国一斉の緊急事態宣言が発せられ、以後気の休まることのない１年でした。波状的に何回も感染拡大が起こり、そのたびに、新型コロナウイルス感染を学内に入れぬよう、学内で広がらぬようという対策に多大な時間を要しました。前年度末に設置していたCOVID-19対策会議（教育研究審議会メンバーと専門家会議、合計14名）にて方針を決め、学生や全教職員に発信しました。

一方、国からは以前と変わらぬ教育効果に近づけることを求められました。しかし看護学教育に欠かせない臨床実習は臨床現場にその余力があってこそのもの、受け入れて下さる病院との連携を強め、実習方法を工夫しました。幸い本学では卒業生の就職、日頃から臨床教授を任命させていただく、教員も熱心に連絡を取るなど、関係の基礎固めができており、最大限のご配慮をいただいたものと感謝しております。

さらに入試においても、A.A.（アドミッション・アドバイサー）による高校生の勉学状況の把握や、タイミングを見計らった対面での高大接続会議の開催等、高校と情報交換しながら国からの指示に沿った入試が実施できたと考えています。

大学の地域貢献活動は残念ながら自粛せざるを得なかったものが多く、日頃お世話になってきた地域の皆さまには申し訳なく思っています。一方、後半にはZoomや動画作成に慣れ、パラグアイの日系社会との13年連続の研修会を途切れることなくオンラインで開催できたことは画期的なことでした。同時に、オンライン研修には参加者が増えるという余禄があることに気づかされました。また、石川県から高齢者・障がい者施設向けの感染予防動画の作成を依頼され、たまたま開講していた感染管理認定看護師教育課程の教員や学生にも頼りながら完成させました。その内容はテキスト化やシンポジウムにも発展し、コロナ禍のもとでの本学の地域貢献に華を添えたと感じています。

これらの陰には何といっても教職員の遠隔型授業法（動画作成含む）の技術習得があります。反転授業の効果に気づいた教員もおり、コロナ禍で得た知識・技術は今後の授業にも反映されるものと思われます。付随的に学内のWiFi環境も一気に進みました。また、在宅勤務も取り入れられ、学外からでもWeb会議に参加できるなど、働き方改革にもつながっています。

学生達も、オンラインでの演習・実習やグループ討議、オンデマンド型の予習・復習、対面授業／遠隔授業の週替わり受講などに早めに適応してくれたと感じます。コロナ終息後もパソコンやタブレットを使った教育や様々な活動が残ることが予想されますが、大学はやはり学生の声が聞こえて初めて活気が出ます。そのことをつくづく感じさせられた１年であったと思います。

このような１年でしたが、例年通りの活動も方法を工夫して行われています。一つ一つについては中を開けてご覧ください。

最後に皆様から本学に対する忌憚のないご意見をうかがえれば幸甚です。

石川県立看護大学　学長　石垣和子

第 21 回入学式（令和 2 年 4 月 3 日）

秋のオープンキャンパス
（令和 2 年 10 月 17 日～ 11 月 1 日）

大学祭（令和 2 年 10 月 24 日）

公開講座「こうすれば安心、コロナ禍の施設ケア」（令和 2 年 12 月 6 日）

パラグアイ日本人連合会からの感謝状及び記念品の贈呈（令和 3 年 3 月 18 日）

専門的看護実践力研修事業（管理者経営研修）
公開講座（令和 2 年 12 月 5 日）

感染管理認定看護師教育課程　修了式
（令和 3 年 2 月 10 日）

第 17 回卒業式・学位授与式（令和 3 年 3 月 13 日）